

ケイボウタイムズ

～警防課の「いま」を伝える～

第18回 航空隊新庁舎（第1期工事）完成 !!

警防課（航空隊）

災害現場での活動を支える「警防部 警防課」。

「ケイボウタイムズ」では、毎号、警防課の各担当による「この時期だから伝えたい」旬なネタを掲載するほか、警防課が取り組む施策や事業についてお伝えします。

ここでは、航空隊が担つてきた活動及び新庁舎の整備事業の概要をご紹介します。

航空隊の実績

航空隊の任務は、大阪市のみならず、大阪府一円の消防活動、山岳・水難救助事業、火災現場の情報収集や避難誘導、火災予防の啓発広報など多岐にわたります。2機の中型ヘリコプターを保有し、その機動力を生かして大規模災害（緊急消防援助隊等）にも出動しています。国際緊急援助隊としては、サイクロン災害（平成3年）におけるバングラデシュ派遣、スマト

はじめに

大阪市消防局航空隊（以下、航空隊）の基地（以下、航空隊庁舎）は、大阪府八尾市にある八尾空港内に位置し、365日の日勤体制のもと、夜間及び早朝の緊急運航等は、招集体制により業務にあたっています。昭和59年の運航開始時は8名体制でしたが、現在は16名体制となっています。航空隊庁舎の老朽化及び狭隘化を受け、令和5年から建替整備が進められ、その第一期工事（事務所棟）が令和7年7月に完了し、新庁舎での業務が開始されました。8月からは、第2期工事（格納庫棟）が始まり、令和8年度末に完了予定です。

主な国内外派遣実績

海外	平成3年5月サイクロン災害（バングラデシュ） 平成16年12月スマトラ沖地震（タイ）
国内	平成23年3月東日本大震災 平成28年4月熊本地震 平成29年7月九州豪雨 平成30年7月西日本豪雨 令和6年1月奥能登地震 令和6年9月奥能登豪雨 令和7年3月今治市林野火災

ラ沖地震（平成16年）の津波による被害を受けたタイ派遣があります。

「災害対策の中核機能として」

大阪府緊急消防援助隊受援計画では、府内地震等の大規模災害が発生し緊急消防援助隊の受援を行う際、八尾空港が航空部隊の活動拠点（ヘリベース）となり、航空指揮本部が設置され、応援航空隊の活動指揮等を行う計画となっています。

新庁舎は、一次受援時に最大10隊（7県3市約80名）の受け入れが可能です。大規模災害時において重要防災拠点となる航空隊庁舎は、人命救助・消火等への即時対応及び中枢としての機能を要求される施設です。航空隊庁舎の建替整備では、老朽化及び狭隘化の解消に加えて、耐震性能の確保、防災機能の向上に配慮した庁舎整備が進められました。

旧庁舎では、緊急消防援助隊の応援を受入れるための十分な設備を確保できなかつたため、新たな庁舎・格納庫を新設するにあたり、適切な施設規模及び機能確保を図るため、敷地を北東部に拡張しました。また、建替え工事期間中もヘリコプターによる航空消防活動の機能を損なうことがないよう、旧庁舎横の民間格納庫を



最新の設備機能

おわりに

今回の建替整備で、大規模災害時の受援体制の充実を図り、新庁舎で新たなスタートを切った大阪市消防局航空隊。

これからも災害活動への対応を強化しながら、「大阪を空から守ります!!」



航空隊紹介の動画
はこちら



左：航空隊新庁舎 右：旧庁舎（新格納庫建設予定）

育児休業を取得した期間は？

三男が生まれてからの1か月間（令和6年8月1日～8月31日）と6か月間（令和6年10月1日～3月31日）を取得しました。

この期間にした理由は、8月は長男・次男が夏休みのため妻一人で3人の育児を行うのは大変だと感じたからです。また、次男が幼稚園の年長で、10月からは運動会や発表会、卒園式など大切な行事が多い時期だったことも理由のひとつです。



中隊長の一言（花谷課長）

数十年前のことですが、私も子育てに関与しました。当時を振り返ると、妻に任せきりで、自分の都合の良い時だけ子どもの相手をしていたと思います。

男性が育児に参加することには賛成でしたが、その間の配置などについては不安がありました。

しかし、周囲から批判の声はなく、私の不安は杞憂だったと今では反省しています。

半年間の育児休業を経て職場に戻ってきた彼を迎えたのは、仲間たちの笑顔でした。

隔日勤務ならではの育休取得にかかる話

私は当時、救助隊の副隊長を務めており、育児休業を取得するにあたって最も悩んだのは、「自分の代わりに誰が乗ってくれるのか」という点でした。

隔日勤務では、一人が休むだけでも隊の運用に大きな影響がでます。さらに、救助隊は専門性が高く、即戦力として現場に対応できる職員が限られているため、代替要員の確保は非常に難しいのが現実です。

その中で、消防隊に所属する先輩が「その期間だけなら乗ったるわ」と手を挙げてくれたことは、本当に心強く、ありがたいことでした。通常の業務に加えて救助隊としても活動するという、大きな負担を引き受けくださった先輩の存在があったからこそ、私は安心して育休に入ることができました。

このことから、育休の取得には自分だけでなく、職場全体の理解と協力が不可欠だと強く実感しました。

だからこそ、私自身も今後は、誰かが育休を取得しようとしたときに、迷わず支えられる存在でありたいと思っています。



復帰前、記念に一枚（髪長くてスマセン…）

3回目となりました「イクキュー」。今回は、隔日勤務であっても、周囲の方の理解と協力で育児休業を取得されたことで、家族との充実した時間を過ごし、絆を深めるとともに大事な「思い出作り」もできました、というお話を伺うことができました。

これから育児休業を取得される方、その同僚の方、皆さんが育児休業取得への理解を深め、助け合することで取得率が向上していくといいですね。次回の「イクキュー」もお楽しみに！

イクキュー



子どもの出生数が年々減少している昨今、子育て世代が安心して子どもを持つ環境づくりが課題となっています。令和7年4月以降、28日間までの育児休業であれば、手取りの10割程度が給付金として支給されるようになりました。

本コーナーでは、これから子どもが産まれる予定のある職員が育児休業の取得を考えるきっかけとなるよう、実際に育児休業を取得した職員の声を紹介します。

今回お話をいただくのは…

浪速消防署救助隊の山内と申します。我が家は、妻（専業主婦）、長男（海知9歳）、次男（陸太郎7歳）、三男（天誠1歳）の5人家族です。

「人生で1番大事なことは、思い出作り」をモットーに、家族5人で毎日楽しく過ごしています。

今回の育児休業を通じて、さらに深くなった我が家との絆と、たくさんの笑顔あふれる時間について、お伝えします。



育児休業取得を決めた理由は？

私は三男が生まれた時に初めて育児休業を取得しました。長男、次男の時は取得していません。上2人の育児は、消防に入ったばかりということもあり、仕事や訓練に追われる日々の中で自分自身にも余裕がなく、あまり協力できていませんでした。

しかし、三男の誕生をきっかけに「今しかないこの時期と一緒に過ごしたい」「父親としてももっと深く育児に関わりたい」と強く感じるようになりました。また、育児休業を取得することにより、三男だけではなく、長男・次男と過ごす時間も増えると考えました。

そして1番は、妻に「育児休業であるんねんけどどうしよう？」と聞くと、「できれば取ってくれば助かる」と言われたことで取得しようとした決めました。

私自身、隔日勤務で育児休業を取得している職員の存在を聞いたことは無かったのですが、育休取得について理解を示してくれる上司、同僚に恵まれ、安心して決断することができました。

育児休業を取得してよかったことは？

育児休業中は、家族と過ごす時間が、育休取得以前に比べて格段に増えました。

毎朝、次男（たまに長男）と一緒に野球の朝練をするのが日課となり、親子の絆がより深まったと感じています。

また、平日でも家族全員でいろんな場所に出かけることができ、思い出がたくさん増えました。

妻からも「いてくれて本当に助かった」と感謝の言葉をもらい、夫婦の関係もより良くなりました。

そして何より、育児をしながらも自分のやりたいことに取り組む時間を少しづつ持てたことが、心のゆとりにつながりました。



ある1日のスケジュール（平日）

- 6:00 起床 朝ごはん準備
- 7:30 次男と野球朝練（たまに長男）
- 8:30 次男 幼稚園へ
- 9:00 食材の買い出し 夜ごはん作る
- 12:00 妻と三男とランチ
- 14:00 次男幼稚園お迎え
- 公園で遊ぶ（一緒に）
- 17:00 夜ごはん
- 20:00 子供就寝
- 21:00 フリータイム
 - ・家事協力
 - ・三男ミルク係
 - ・運動や知識の研鑽
 - ・たまに飲みに行きました

No more ! 事故

～撲滅への道～

119番通報を受けた際、安全かつ迅速に出場することで、いちはやく災害現場へ駆けつける消防車両。

消防車両は、安全に現場へ到着してこそ、最大限の活動が実施できます。

このコーナーでは、各署で実施している交通事故防止への様々な取組や対策を紹介していきます。

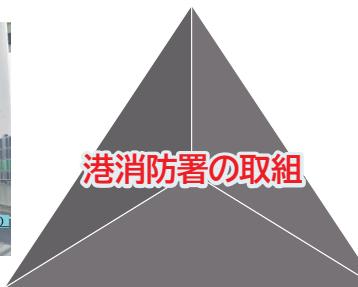
今月は、港消防署の取組について紹介します。

港区の通行ポイント

港区は大阪市西部に位置し、面積7.86km²で北東から南西に細長い形をしています。

東西にみなど通、中央大通、阪神高速16号大阪港線、南北に国道43号線、阪神高速17号西大阪線が通り、海岸部には阪神高速4、5号湾岸線と此花区夢洲への経路となる夢咲トンネルに接続する大阪港咲洲トンネルがあり、市内西部の交通の要所となっています。

大阪・関西万博の開催により乗用車だけでなく大型トラックの往来も多く、国道43号線の高架下では頻繁に渋滞が発生します。また、片側2車線や3車線の幹線道路が多いため、消防車両を運行する際には、周りの車両の動向に細心の注意を払い、機関員は次のハンドル操作を乗組員全員に共有し、乗組員は周囲の状況を適時確認しコメントリードライブを実施するように心がけています。



港消防署田中出張所のメンバー

この車、動かす時、気を付けて

港区は西区、此花区、大正区、住之江区と隣接しており、他区での災害にも多く出場します。西区を除く隣接管内へ出場する際に使用する阪神高速や国道43号線は乗り口、降り口に注意が必要です。出場する際には、小隊乗組員が一体となり災害点への乗り口及び降り口を確認し、確実に災害現場に到着出来るよう努めています。

また、港消防署には、遠距離大量送水システム(Dragon Boost unit)を搬送するためのDB車が配置されています。DB車は、猛暑における火災現場で活躍するバネル水槽やエアーテントまた水難現場で使用する救命ボート等多種多様な資器材を搬送することを任務としています。2名乗車のはしご車との乗り換え運用のため、小隊長と機関員との意思疎通が重要となり、車両の死角や積載物の固定、左右バランスに気を付けてコメントリードライブを徹底しています。



DB車外観と積載部分(内部)

交通事故防止への取組



直径8mの円の「たこつぼ」

港消防署では、静止物件事故防止のための運転技術の向上と、機関員と各誘導員間の安全確実で連携の取れた誘導を目的とした取組として、署庭にカラーコーンとセーフティバーで直径8mの円の「たこつぼ」を作成し、狭隘な場所での車両感覚を習得する訓練を行っています。

また、隣接区等に出場する際は、主要幹線道路の乗り口等を説明したポイントと実際に走行した動画を共有し、安全確実な災害現場到着に役立てています。小隊乗組員全員が共通の認識を持つことが、災害出場時の確実な走行経路選定や消防車両の安全運行に繋がっています。

港消防署の交通事故防止を担当する田中出張所には、常備車STの他に予備車3台(ST、R、A各1台)が配置されているため車両の搬出搬入機会が多く、各機関員は各車両の車両諸元や特性を確実に把握するよう努めています。



安全確実な連携の取れた誘導

無事故チャレンジ達成日数(令和7年8月末時点)

北	都島	福島	此花	中央	西	港	大正	天王寺	浪速
26	87	43	24	18	859	594	255	940	40
西淀川	淀川	東淀川	東成	生野	旭	城東	鶴見	阿倍野	住之江
139	20	43	128	14	198	41	362	136	67
住吉	東住吉	平野	西成	水上					
315	245	6	219	590					

企画課服務指導からのコメント

～増加する交通量を見据えた安全対策～
港消防署の取組は、大阪・関西万博開催による交通量・大型車両増加という地域特性も踏まえ、非常に効果的に実践されています。特に機関員がハンドル操作などの車両動向を都度乗組員全員に共有することは、他の乗組員による周囲の安全確認をより確実なものとし、現場到着までの事故防止に大きく寄与しています。また、DB車による他区への出場時、高速道路の出入り口の確認や、資料・動画による道路情報の共有が、安全な緊急出場を支えています。今後もこうした安全確保への取組を継続されることを期待しています。

明
過
日
に
備
過
去
に
学
ぶ
Vol. 7

今回のテーマは「熱傷」

(警防部司令課)

このコーナーでは、「安全文化の醸成と安全管理の徹底」を図ることを目的に、消火・救助・救急など過去の負傷事例を振り返り、事例からの学びについて紹介していきます。ここで紹介する内容が、皆さんの日々の活動に役立ち、プロフェッショナルとしての安全意識をさらに高める一助となることを願っています。

今回は、熱傷による職員負傷事故例と当局の装備について紹介します。

直近隊員としてタンク水にて延焼阻止放水を実施中に熱気は感じていたが、その場で放水を継続したもの。なお、受傷時は負傷に気づかず、休憩時に右手手背部に痛みを感じ消防用手袋を外した際に、負傷に気づいたもの。



負傷状況

年度	年齢	受傷機転	症病名
元年度	20代	溶融した金属落下物の付着	右手第4指II度熱傷
元年度	20代	屋内進入中に受傷	両手背部II度熱傷
3年度	30代	屋内進入中に受傷	右手背部II度熱傷
4年度	30代	高温の液体の付着	両手第1指及び第2指II度熱傷
4年度	20代	火災による輻射熱の疑い	右手手背部第2～4指II度熱傷
5年度	30代	溶融した電線被覆の付着	顔面熱傷
5年度	30代	高温の落下物の付着	右手甲部III度熱傷疑い
6年度	20代	高温の落下物の付着	後頸部のIII度熱傷
6年度	20代	高温の煙の吸入	気道熱傷の疑い
6年度	20代	火災による輻射熱の疑い	左肩深部II度熱傷

当局の装備について

消防用手袋

当局は、「消防隊員用個人防火装備に係るガイドライン」に基づき、防火手袋に求められる性能等を考慮し、熱水による火傷防止の他、感染防止のため防水層を設けた仕様を導入しています。



防火衣

当局に導入している防火衣はISOが策定した、ISO 11999シリーズ(建物内部で発生した火災の高いレベルの熱と炎に曝される危険のある消火活動用個人装備の試験方法と要求事項)を基準とし、防火衣の安全性能を満たしています。

防火衣は、正しい着装で本来の熱防護性能を発揮するため、肌着の上への直接の着装やインナーを取り外しての着装は、断熱効果を下げ、熱傷のリスクを高めます。



熱傷の防止のためには、露出部がないよう消防用手袋、防火衣を正しく着装し、なるべく重ね、空気の層を確保することが重要。

危険回避の知識の備え

火災現場の温度は最盛期には1,100～1,200°Cにも達することがあります。アルミは約660°Cで溶融するため、溶けたアルミが滴り落下することがあります。

種類	溶融温度
鉄	約1,500°C
ガラス	1,200～1,400°C前後
アルミ	約660°C

熱傷の防止には、消防用手袋、防火衣の確実な着装が重要です。

上記の過去の事例などをもとに、熱傷防止について小隊や中隊等で話し合ってみてはいかがでしょうか。

当局の重点目標に掲げる『安全文化の醸成と安全管理の徹底』のとおり、職員一人ひとりが「絶対に一人の職員も負傷させない」という強い意識のもと取り組んでいきましょう。

さ
い
ご
に

センター教育・研修を徹底解剖

Just Do It!

第16回 高度専門教育「指揮研修(第21期)」

高度専門教育訓練センター



今月の担当教官(船越)のひとこと

常に危険と隣り合わせの災害現場で、「いま何が危険なのか」「どんな危険が迫っているのか」を見抜き、指揮にあたる責任の重さを痛感した研修でした。

船越 将人

本月は高度専門教育の一つである指揮研修について取り上げます。
本研修は警防担当の消防司令長、または消防司令の階級に当たる職員(受託研修生)については各級指揮者またはその代行者)を対象としており、指揮活動に必要な知識及び能力の向上により、各所属における円滑な指揮活動の遂行に資すること、及び指揮活動要領についての指導者となり、広く職員へフィードバックすることを目的としています。
今年の第21期は大阪市25署から各1名の計25名、大阪市を除く府内消防本部(局)等から20名の合計45名が受講されました。

一方、社会の行動様式の変化や科学技術の発展により、消防が対応する災害の内容も日々変化し、指揮者の冷静かつ迅速な判断に基づく、臨機応変な指示命令がますます重要になっています。指揮活動は高レベルなスキルが求められます。指揮活動は「指揮活動総論 安全管理」では、災害現場での指揮者の状況判断に必要な8則が紹介されました(表)。

高度専門教育 指揮研修(第21期)

【実施日時】

令和7年6月25日(水)~26日(木)
9時00分~17時30分

【研修内容】()内は講師の所属

- 指揮活動総論 安全管理 担当:藤岡 敦司
(司令課統括方面隊長)
- 情報管理 担当:田中 信成
(司令課担当係長(指令管制))
- 現場指揮I 一般建物(司令課南方面隊)
- 現場指揮II 高層建物(司令課東方面隊)
- 現場指揮III その他の災害(司令課北方面隊)



現場指揮I 一般建物

実災害では、増強隊を要請しても出場から現場到着までに一定の時間がかかります。災害情報から、消防力の不足が明らかとなつた場合は、時機を失すことなく必要となる消防隊の種別、隊数や任務を的確に判断し、迅速に増強を要請できるかが重要なポイントの一つになります。

講義では実際の火災現場映像の紹介もあり、図上訓練だけでは想像しにくい実災害現場ならではの緊迫感を味わい、いかに状況判断や指示命令に迅速・正確に判断するかを感じることがで

- ①情報を重視せよ。ただし過信するな。
- ②現示された状況を冷静に読め。変化の兆候を見逃すな。
- ③実体の推定は危険側に立て。根拠のない楽観論を排せ。
- ④一局面に固執するな。常に俯瞰的視野に立て全局面を観察せよ。
- ⑤現示状況に即応せよ。そのための指示命令の修正・変更をためらうな。
- ⑥安全を賭けるな。安全の範囲が消防活動の限界と思え。
- ⑦最善を望むな。ただし、最悪事態だけは防止せよ。
- ⑧状況を圧倒する消防力を集中せよ。現場は力の対決である

『現場指揮』富樫 金三郎(元東京消防庁装備部長、元消防大学校客員教授)著より

これらの教訓は、指揮者はもちろんのこと、災害現場の最前線で活動する隊員一人ひとりが、胸に刻むべきものばかりです。

本講義では、講師から付与された情報を元に図上訓練が行われ、「指揮卓の記入」「各消防隊への必要な任務分担」をはじめ、増強隊の要否等

「講座「指揮活動総論」」
――安全の要を学ぶ――

■指揮者に必要な能力とは

当局では団塊の世代といわれる職員層の退職により、「現場経験の豊富な職員」から「経験値の少ない若い職員」が中核を担う組織への転換期を迎えています。

一方、社会の行動様式の変化や科学技術の発展により、消防が対応する災害の内容も日々変化し、指揮者の冷静かつ迅速な判断に基づく、臨機応変な指示命令がますます重要になっています。指揮活動は「指揮活動総論 安全管理」では、災害現場での指揮者の状況判断に必要な8則が紹介されました(表)。

■「講座「指揮活動総論」」
――安全の要を学ぶ――

■指揮者に必要な能力とは

当局では団塊の世代といわれる職員層の退職により、「現場経験の豊富な職員」から「経験値の少ない若い職員」が中核を担う組織への転換期を迎えています。

一方、社会の行動様式の変化や科学技術の発展により、消防が対応する災害の内容も日々変化し、指揮者の冷静かつ迅速な判断に基づく、臨機応変な指示命令がますます重要になっています。指揮活動は「指揮活動総論 安全管理」では、災害現場での指揮者の状況判断に必要な8則が紹介されました(表)。



指揮活動総論 安全管理

■「講座「指揮活動総論」」
――安全の要を学ぶ――

■指揮者に必要な能力とは

当局では団塊の世代といわれる職員層の退職により、「現場経験の豊富な職員」から「経験値の少ない若い職員」が中核を担う組織への転換期を迎えています。

一方、社会の行動様式の変化や科学技術の発展により、消防が対応する災害の内容も日々変化し、指揮者の冷静かつ迅速な判断に基づく、臨機応変な指示命令がますます重要になっています。指揮活動は「指揮活動総論 安全管理」では、災害現場での指揮者の状況判断に必要な8則が紹介されました(表)。

■「講座「指揮活動総論」」
――安全の要を学ぶ――

■指揮者に必要な能力とは

当局では団塊の世代といわれる職員層の退職により、「現場経験の豊富な職員」から「経験値の少ない若い職員」が中核を担う組織への転換期を迎えています。

一方、社会の行動様式の変化や科学技術の発展により、消防が対応する災害の内容も日々変化し、指揮者の冷静かつ迅速な判断に基づく、臨機応変な指示命令がますます重要になっています。指揮活動は「指揮活動総論 安全管理」では、災害現場での指揮者の状況判断に必要な8則が紹介されました(表)。

研修で学んだことを 全職員で共有してほしい

本研修は、特定の職員だけを対象とするものですが、研修内容は災害現場で部隊指揮に当たる職員だけではなく、各小隊長や隊員として活動する職員も知つておく必要があるのです。受講生には、受講後研修として所属職員に研修内容をフィードバックしていただき、全職員の知識向上に寄与していただきたいと思います。

現実の災害現場は、常に危険と隣り合わせです。そこで活動する消防隊員の安全を守りつつ被害軽減を図るために、指揮者の的確かつ迅速な判断に基づく指揮が必要不可欠です。本研修が、受講生にとって「理想的の指揮者像」に近づく一助となることを願つています。

コマンドアイ



様々な事案から災害活動を振り返る

事前計画を遵守した有効な筒先配備で早期に火災を鎮圧

■はじめに

今回紹介する火災は平家建住宅から出火。周囲は狭隘な路地に囲まれておりホース延長が困難な状況であった。しかし狭隘路地に留まることなく、火元建物の背面にある住宅内をホース延長するともに、筒先配備のために火元建物の的確な箇所の破壊作業をしながら主火力制圧と延焼阻止を効果的に行つたことにより、早期に鎮圧した火災である。



火元建物の状況（北西から撮影）

■火災概要

覚知日時	令和7年2月某日
第1出場	10時20分
包囲態勢完了時間	10時54分
鎮圧時間	11時29分
鎮火時間	14時20分
建物構造	木造瓦葺モルタル塗一部トタン張平家建
（建／延120m）	1棟2住宅2空家
焼損程度	10m ² 焼損及び小屋裏59m ² 焼損
負傷者等	なし

■活動内容

火災は特定密集地域で発生。火元建物は木造の平家建1棟2住宅のみ居住しており、中央の2室は空家であった。最先着した消防隊は軒先全体から濃煙が噴出しており、火元建物の西端住宅が20m程度燃焼中で北を除く3方向に延焼危険があつたため、警防本部に即報している。特に火元建物の南面は、同様の平家建の長屋住宅（以下、「A住宅」という。）が密集していたが、軒先全体から濃煙が噴出していたが、火元建物から火元建物に即報してある。特に火元建物の南面は、同様の平家建の長屋住宅（以下、「A住宅」という。）が密集していたが、軒先全体から濃煙が噴出していたが、火元建物から火元建物に即報してある。特に火元建物の南面は、同様の平家建の長屋住宅（以下、「A住宅」という。）が密集していたが、指揮本部からは視認が難しく、状況把握に困難を伴つた。

指揮本部は背面の第1指揮班から火元建物に高齢者等災害弱者の情報をあり早期の確認を要したが、のちに外出中であると判断。進入経路を探すも周囲は狭隘で路地を通つてのホース延長は困難な状況であった。そこで小隊長は、延焼危険であるA住宅の西端の住宅内を火元建物に向かつてホース延長する方針に転換。またA住宅の室内に滞在していた住人男性1名にも屋外へ避難するよう指示するとともに、延焼阻止のためさらに東隣の住宅にもホース延長し、1線2口の多口放水により火元建物南面へ迅速に放水した。火元建物南側の80cmの路地はトタン塀で区切られていたが、トタン塀を破壊し屋内進入し、南面の延焼阻止及び火元建物の主火力の制圧を同時に遂行。南面の放水が遅れた場合、火元建物の北面からの放水のみでは、A住宅にも延焼が及ぶ可能性があり、早期にホース延長経路を確保し延焼阻止と主火力制圧を同時に実施したことで、火元建物の焼損を10m²にとどめる



火元建物南側トタン塀を破壊した状況（南東から撮影）
火元建物（左）南側トタン塀の状況（西から撮影）

■活動のポイント

①事前計画の遵守

②状況把握と判断

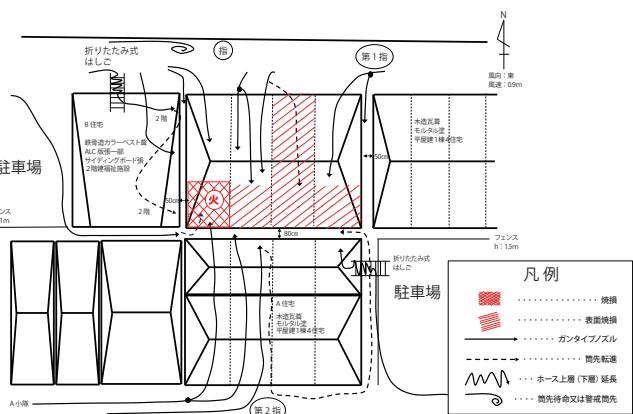
③消火隊による破壊作業

本火災において特筆すべきは、南面の筒先配備状況である。南面の防ぎよを指定されたA小隊は、南側の消火栓に部署し現場へ向かうと、火元建物南面に80cmの狭隘路地を挟み、平家建の長屋住宅が並んでいるのを確認。火災の状況から出火箇所は火元建物の南側であると判断。進入経路を探すも周囲は狭隘で路地を通つてのホース延長は困難な状況であった。そこで小隊長は、延焼危険であるA住宅の西端の住宅内を火元建物に向かつてホース延長する方針に転換。またA住宅の室内に滞在していた住人男性1名にも屋外へ避難するよう指示するとともに、延焼阻止のためさらに東隣の住宅にもホース延長し、1線2口の多口放水により火元建物南面へ迅速に放水した。火元建物南側の80cmの路地はトタン塀で区切られていたが、トタン塀を破壊し屋内進入し、南面の延焼阻止及び火元建物の主火力の制圧を同時に遂行。南面の放水が遅れた場合、火元建物の北面からの放水のみでは、A住宅にも延焼が及ぶ可能性があり、早期にホース延長経路を確保し延焼阻止と主火力制圧を同時に実施したことで、火元建物の焼損を10m²にとどめる

指揮本部が設置された火元建物北側は東西にわたつて濃煙が噴出している状況であった。煙の状況に惑わされ、北面からの火元建物による破壊作業は東西にわたつて濃煙が噴出している状況であった。

東方面隊

ることが判明。また、西側の隣接建物（以下「B住宅」という。）は福祉施設であったが、消防隊が早期に筒先配備し、2名を避難誘導。負傷者は発生していない。各隊は事前計画通りに水利部署を実施し、軒先から噴出する火元建物の濃煙に惑わされることなく、事前計画に基づいた筒先配備を実施。連携した延焼阻止と主火力の制圧により、焼損を火元建物10m²及び小屋裏59m²に抑えることができた。



筒先配備に偏ると南面の延焼阻止が遅れるばかりでなく、火勢をおいていくことで、より延焼が拡大する危険性があつたが、全隊が事前計画を遵守したホース延長を遂行したことにより、早期に包囲態勢を整えた。

延焼危険が大きい方面から順に筒先配備をする際には、活動面での重複が生じたり、筒先がない方面が発生し、結果として延焼が拡大する恐れがあるため、これを防ぐ事前計画が不可欠である。計画に従つて活動することで、指揮者は各小隊の筒先配備状況を予測でき、高次出場隊に劣勢な方面へ筒先配備を指示できる利点もある。

南面の延焼阻止を実施したA小隊は、早期に延焼阻止の筒先配備の確立を目指し、狭隘路地でのホース延長に固執せず、隣接する建物内を通つてホース延長することを選択した。日常的に周囲の状況を多角的に捉え、あらゆる選択肢から最良の活動を決定できるよう、状況を把握的確な判断力を培うことが重要である。

本火災では、各隊の事前任務の実行し適切な箇所を破壊することにより効果的な放水を実施することができた。破壊を躊躇することとで、延焼経路の燃焼状況を確認できなくなったり、小屋裏を突破されてしまつ可能性がある。さらには放水が火元に届かない場合もあるため、資器材の使用方法を理解するとともに、必要な場面で臆することなく破壊できる技量を身に付けることが求められる。

本火災では、各隊の事前任務の実行し適切な箇所を破壊することにより効果的な放水を実施することができた。破壊を躊躇することとで、延焼経路の燃焼状況を確認できなくなったり、小屋裏を突破されてしまつ可能性がある。さらには放水が火元に届かない場合もあるため、資器材の使用方法を理解するとともに、必要な場面で臆することなく破壊できる技量を身に付けることが求められる。

各隊が指定方面を遵守し、早期に包囲態勢を完了することで被害を最小限に抑えることができた、方